



ロバート・ケネディ：成長する魂

三好 千春

今年、ロバート・フランシス・ケネディ（愛称ボビー、以下RFKと略称）暗殺40周年に当たる。アメリカではそれを記念して次々と彼に関する本が出版され、8月には伝記映画の製作も発表されたが、現代の日本で彼について知っている人はあまりいないだろう。ジョン・F・ケネディ大統領の実弟でケネディ政権では司法長官を務め、大統領候補者として1968年に暗殺された人、いや、オバマ暗殺を期待するかのように受け取られたヒラリー・クリントンの失言で言及された人といえば、少しはお分かりになるだろうか。

私がRFKに強い関心を抱いているのは、彼がカトリック信者として真摯に生きた政治家だったことに加えて、大なる「成長する力」を持ち、生涯にわたって成長し続けた人だからだ。特に彼の成長する力が顕著になったのは、RFKにとって絶対的な存在だった兄のケネディ大統領が暗殺された後からである。彼は兄の死に完全に打ち砕かれて、徹底的に苦しんだ。神から最も苦い杯を突きつけられ、一切逃げることなくそれを最後まで飲み干した、そんな印象を受けるほどに苦しみ抜いた。そして痛みに満ちた彼は、この世の痛みにつながった人間へと変貌を遂げる。

1965年にニューヨーク州選出の上院議員となつてからのRFKは、ニューヨーク市最大のスラムの再開発に熱心に取り組み、ミシシッピデルタの最貧困と差別に喘ぐ黒人層やアパラチアの貧しさに沈む白人労働者のために尽力し、カリフォルニアで不当な搾取を受けて抵抗するヒスパニック系農業労働者と連帯し、極めて高い自殺率と失業率そして自尊心が踏みにじられることに苦しむ、「アメリカインディアン」の実情に怒り、彼らのために奔走した。また、ベトナム戦争に強く反対し、南アフリカに行つて反アパルトヘイト運動の人々を勇気づけた。

ヒスパニック系農業労働運動の指導者C・チャベスが「彼だけが、他のアメリカの政治家が誰も越えたことのなかった一線を越えた」と評しているが、これはRFKの本質を突いた言葉である。彼はその短い活動期間の中で、次々と一線を、人種や貧富や偏見によって人々を分断していた種々の境界線を越え続けた。それが彼の成長のあり方だった。

彼の成長の源、それは自らが苦しみによつて打ち砕かれたために打ち砕かれた人々の苦しみを想像でき、かつその人の目を通して物事を見たこと、何か言うべきものを持っている人に出会うと自分の心を傾けてそれを本当に聴くことができたこと、そしてかつて耳にしたことのなかったことを聴いたとき、それまでの自分の枠組みを踏み超える勇気を持っていたことだと私は思っている。

1960年に兄の大統領選挙を責任者として仕切つたとき、彼は「無慈悲」と呼ばれていた。兄を思うあまり他人に容赦なかったからだ。しかしその後、司法長官として公民権運動に深く関与し、兄の死を体験してこの世の様々な痛みとつながった彼は、「魂を持ったケネディ」と評され、黒人からは「青い目をした魂の兄弟」と愛され、「声なき声の代弁者」と言われるに至つた。

RFKの人生は、一人の人間が与えられた苦しみ、遭遇する社会の現実、出会つたことのなかった人々の声から逃げることなく真剣に向かい合うとき、そこに何が起るかを私たちに教えてくれる。人は限りなく成長していける。特に、他者との関係性において、愛において。神は私たちの魂をそのように造られている。

(MIYOSHI, Chiharu: 人文学部准教授)

ヘボンと日本人の神観について

栗山 義久

1. 和英語林集成デジタルアーカイブス

先般、明治学院大学創設者である米国長老派教会宣教医ヘボン（美国平文：James Curtis Hepburn, 1815-1911）編纂の日本初の和英辞典『和英語林集成』諸版が明治学院大学図書館 Web ページ上（<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.>）にデジタルアーカイブスとして公開された。

1867（慶応3）年に出版された『和英語林集成』は、1872（明治5）年には再版、1886（明治19）年には三版まで改訂され、比肩するもののない和英・英和辞書として明治末まで広く用いられてきた。最近まで幾種類もの復刻版が出版されている¹⁾が、インターネット系由で誰でも何処からでも自由に自筆原稿、一～三版ほか諸版（ロンドン版、ニューヨーク版、上海版、縮約丸善版）を手軽に比較しながら見ることが可能となった。100年以上も前の明治時代の辞書が現在でも注目されるのは、初版は幕末の、再版は明治維新時代の、三版は明治維新以降の日本語を伝えており、その時代の言葉を映した貴重な資料となっているからである。

そこで、ここでは『和英語林集成』を中心に、「God」の訳語を通して日本人のキリスト教神観の受容について紹介したい。

2. 和英語林集成におけるカミの語義

日本布教における最初の課題は、神道・儒教・仏教が混然と共存し、それらにより形成された文化、習俗が深く浸透している日本人に、キリスト教をその地の言葉でいかに表現し、移植させるかであった。教会用語の採用には、既成の宗教用語を充てる、原語をそのまま用いる、あるいは日本語における新しい漢字を用いるなどの方法があるが、中でも万物の創造主「God」（Deus）をどう表すかは大変悩ましい問題だった。

初版の前書きにあるように、ヘボンが参照することができた先行辞書は、イエズス会が250年前の1603年に長崎で印刷した『日葡辞書』²⁾とメドハースト（W. H. Medhurst）が1830年にバタビアで発行した『英和・和英語彙』³⁾だけだった。従って、生きた日本語を収集するために、日本語の古典、当時流行していた小説（『東海道中膝栗毛』、『南総里見八犬伝』⁴⁾や節用集などを参考とする⁵⁾と共に、直接接した各階層の日本人から精力的にことばを採取したことが知られている。そこでは日本人が崇拜、

-
- 1) 初版復刻版：北辰（1966年）、再販復刻版：東洋文庫（1970年）、三版復刻版：講談社（1974年）、三版復刻縮刷版：講談社（1980年）、初版・再販・三版対照総索引3巻：港の人（2000-01年）。
 - 2) 『日葡辞書』現存4、5部の稀観本のため、明治学院大学図書館に所蔵されているパジェス（Leon Pages）による仏訳『日仏辞書』ではないかとの説もある。
 - 3) W. H. Medhurst "An English and Japanese, and Japanese and English vocabulary" Batavia, 1830.
 - 4) 江崎裕子『『和英語林集成』「和英の部」の用例と『南総里見八犬伝』』『ICU日本語教育研究センター紀要』Vol.3, 1994年。
 - 5) 飛田良文によれば、江戸時代後期（1848～64年）に出版された『節用集』38種のうち数冊の『節用集』を使用し、その中心は『大日本永代節用無尽蔵』（1849年）だと推論している（『『和英語林集成』の語彙と性格－江戸期節用集との比較から－』『文芸研究』50, 1965年）。

礼拝する「カミ」は、神棚、神社の諸々の神々であり、仏壇、お寺の仏であった。

『和英語林集成』の初版（1867（慶応3）年）では、「カミ」の項目は神道の神のみで、仏教の「ホトケ」と区別している。これは、『日葡辞書』の「Cami 日本の異教徒が尊崇する cami」「Fotoqe 日本人が救霊の事をこいねがう Idolos（偶像）」と対応しているが、一方英和の部では、「God」に神道の kami と仏教の hotoke を充てている。つまり日本人が拝む kami, hotoke は我々の「God」にあたるとしているが、「God」を日本語でどう表現するかは触れていない。これは編纂の最初の目的が、外国人の日本語学習にあったためと言うこともあるが、この時点では未だ決めかねていたのではないだろうか。

【初版】KAMI, カミ, 神, n. God. This word is applied only to the deities worshiped by the *Sintoo*.

HOTOKE, ホトケ, 佛, n. The general name for the divinities worshiped by the Buddhists, who were all originally human...

英和の部 GOD, — *of the shintoo*, kami; shin. — *of the Buddhists*; hotoke.

再版（1872（明治5）年）になって、ヘボンが「カミ」の語義にキリスト教の絶対神「God」を付け加えている。丁度この年に『馬可傳福音書』、『約翰傳福音書』を、翌年に『馬太傳福音書』を刊行していることから、聖書翻訳の中で訳語としての「神」が確定されたことが伺える。

神道の kami は *yaoyorodzu*（八百万）の神として、日本書紀において最初に現れた *kuni-toko-tachi*（国之常立神：古事記では別天神五柱の後に現れる神世七代の神の一人）を登場させている。八百万の神としながら国土創世神話の神を例示したのは、天地開闢のとき、万物生成の始まりであり創造の源であったこれらの神に、天地創造の「God」への類推が決め手となったのであろうか。

【再版】KAMI, カミ, 神, (shin), n. The deities of the *sintoo* religion, of whom there are said to be *yaoyorodzu*, — eight millions. The first of the kami *kuni-toko-tachi*, is said to have appeared after the separation of matter into heaven and earth, in which it had been enveloped, and to have come forth in the form of a rush sprout (*ashi-gai*). The *Tenjin*, or *kami* of the *kamiyo* period, are said to be *hitori naseru* self produced; while the *chi shin*, or earthly *kami*, are said to be produced by the union of the dual principles, *In* and *Yo*. This word is now used by Christians, as an equivalent for $\theta\epsilon\omicron\sigma$, DEUS, and God.

三版（1886（明治19）年）においても、the only で強調されているが「God」の訳は変わらない。ここでは、神道のカミ、八百万の神は、本居宣長の「古事記伝 三之巻」からの引用を通して定義付けを行なっている。そこでの神は、『古事記』『日本書紀』などに神として登場し、のちに神社で祭られる御霊をはじめ、人間のみならず動植物、自然物など、ありとあらゆるものが神として位置付けられる、日常的でないすぐれた特性をもち、畏敬されるもの達である。そして、そのすぐれた特性には、邪悪なもの、おぞましいものも含まれている。

【三版】KAMI, カミ, 神, (shin), n. The deities of the *sintoo* religion, of whom there are said to be *yaoyorodzu*, eight millions, i.e. innumerable. This word is now used by Christians as the only Japanese equivalent for DEUS, and God. Motoori says, as quoted by Hirata in his Commentary on the Kojiki, in explanation of this word, *ame tsuchi no moro-moro no kami tachi wo ... suguretaru koto no arite kashikoki mono wo kami to wa iu nari*.

この神々に関する具体的な本居宣長の記述は、古来より外から多くの文明を取り入れ、独自の文化を育んできた日本のカミを集約したものと言える。そして、それは当時ヘボンが直接見聞きし、あるいは文献から収集したまさに日本人の神観そのものであったのだろう。

3. 「God」の翻訳語の変遷

ではどうして、ヘボンは「God」の訳語に全く意味の異なる既成の宗教用語「神」を選んだのだろうか。その背景として、日本・中国におけるキリスト教布教の長い歴史がある。そこで、この問題に最初に直面したキリシタン時代からその訳語の変遷を辿ってみよう。

フランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier, 1506-1552) が、鹿児島県出身の日本人アンジローの協力を得て、「デウス」にあたる言葉として「ディニチ (大日)」を採用した際、仏教の一派との誤解を生むこととなったため、訳語を原語の「デウス (Deus)」に戻した話は有名なエピソードとして残っている。これは、協力者アンジローの仏教的世界観から、ザビエルが大日如来 (真言宗で重要視される大日如来は、輝く太陽に由来する大宇宙の根本仏) を日本人が崇拝する「唯一の神」と解釈したことによる。また、吉田神道の中に儒教的 (天道) と結合して主宰神の理解が進んでいたことから、大日に次いで、「天道」とか「天主」という語を媒介するようにもなった。しかし、1591年以來、公定教理書『ドチリナ・キリシタン』が刊行されて、「デウス」に統一され、訳語は使用されなくなる。一方、1584年以來布教が進められた中国では、当初から「天主」が用いられていた。1844年以來のカトリック再布教は香港を拠点とした関係もあり、中国の影響下に「天主」を引き続き用いていた。⁶⁾

日本において「神」という訳語が見られるようになるのは19世紀に入って、聖公会のウィリアムズ (Channing Moore Williams) らが来日し、ブリッジマン=カルバートソンの中国語訳聖書をもとに、「God」の日本語訳を「神 kami」としたことが始まりと言われている。再布教時代、中国経由で来日した宣教師も多く、漢訳聖書が聖書の日本語訳においては大きな影響を与えた。丁度ヘボンが来日した頃、中国のプロテスタント入華宣教師の間で、聖書翻訳における用語に関して大きな論争 (Term Question) が起きている。

モリソン (R. Morrison) は、イギリス聖書協会から聖書漢訳を委嘱され、1814年に『新遺詔書』、1823年にはミルン (W. Milne) と協力して『旧遺詔書』を漢訳し (合せて『神天聖書』)、その間に『英華字典』も編纂する。やや遅れて漢訳聖書改訂事業の中心人物メドハーストも『英華字典』(1847-48年) を編纂するが、そこでは「God」の訳語にモリソンの「神」に対して「上帝」を採用する。モリソンの死後、『神天聖書』改訳の委員会が組織されるが、委員長メドハーストは「上帝」を主張し (イギリス人宣教師が同調)、一方ブリッジマン (E. C. Bridgman) は「神」を譲らず、両者別々の漢訳聖書を出版する事態となった。

メドハースト側は、「神」が単なる「spirit」を表すものに過ぎないこと、それは諸霊を意味し唯一の God を表すには適当でないこと、礼拝の対象にもならず至上存在 (The Supreme Being) を表すには「上帝」の方がふさわしいことなどを挙げる。一方ブリッジマンほか米国聖書協会 (American Bible Society) は、「上帝」は「天の支配者」「至上の支配者」を意味し、Deity を表すよりも政治的役職の名である。「上帝」には五天の五帝の意味もあり、無数の支配者を拝することと矛盾しない。中国の皇帝がこの名によって呼ばれてきているのに対し、「神」は礼拝の対象として総称的に用いられていると主張した。この結果、ブリッジマン=カルバートソン改訳の中国語訳聖書 (新約1859年、旧約1862年) では、これまでの「上帝」にかわり「神」が、「神」にかわり「靈」が、「仁」にかわり「愛」が用いら

6) 『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、1988年、「かみ 神」の項参照。

れ、聖書の日本語訳にヘボンをはじめ大きな影響を与えることになる。

ただし、日本語の「神」と中国の「神」はもともと異なっていた。和辻哲郎は次のように指摘している。

敬称である「かみ」には本来「超人的なもの」を意味する傾向はないが、既に漢語の「神」と結びつき、そうして上代信仰の対象たる畏敬すべき神聖なものの敬称として常用せられる以上は、そこに漢語「神」の有する超人的な意味が滲透して行かずにはいない。かくして「かみ」は真実に「神」となる。しかし直感的な日本人が漢人の意味するままの「神」に落ちつく筈はない。そこで「神」は漢人の意味するよりも遥かに具象的な「人間神」に変化する。ここに於てか神代史の語る如き「神」の概念が可能になって来るのである。⁷⁾

中国人にとってキリスト教の「カミ」は新しい「カミ」の観念であるが、「上帝」であれ「神」であれ既成の言葉であり、伝統的な概念を取り除くのは難しい。モリソン自身、晩年には「神」の語に疑問をもち、「真神」、「神主」、「神天」、「天」、「神天上帝」等を多用している。ところが、日本のアメリカ系宣教師の間では、ブリッジマン＝カルバートソン訳に親近感があり、周辺日本人信徒も、「God」と「神」の相違にそれ程関心がなかったのか、論争も起きずに「神」に落ち着いていった。

しかし、訳語の決定と日本人によるキリスト教の神観理解とは、また別の問題がある。明治 36 (1903) 年にいたっても津田左右吉は次のような疑問を呈している。

「神」といふ語をきゝて心に感ずるところは God といふ文字を見て感ずるところと甚だ同じからず、「主なる神」といへばほとんど何等の感をも与へざるに、God the Lord といへばおのづから一種敬虔の情を起さざるを得ず、こはわが国語に God といふ語の意義あるものなく、「神」といふ意の God と同じからざるにより、またわが国民が歴史的に God といふ観念を有せざるによるべし、基督教を宣布せんとするものは、何故にこの異なる意義を有する「神」の語を以て God の意をあらはさんとするか⁸⁾

実際の布教の現場でも、従来の「神」と異なることを明らかにするため、「上帝」、「天父」、「天帝」、「真神」「真の神」などを使用していたことが伝えられている。これは、キリスト教の「神」と日本伝統の「カミ」とを混同する恐れを感じていたからに他ならず、一方では全く異なることを理解していた証とも言える。「上帝」、「天帝」を持ち出したのは、中国布教においてマテオ・リッチが儒教の経典にある「上帝」が「天主」と同じであると説いた手法に習ったものである。

ちなみに、『和英語林集成』には、「上帝」の見出し語はなく、帝は全て日本の "Emperor" を指している。そして「天主教」「キリシタン」は既存の言葉として初版から、「耶蘇」は再版から見えるが、「キリスト」「イエス」は三版で初めて登場させている。

【初版】MI-KADO, ミカド, 御門, n. The Emperor. Syn. KINRI, TENSHEI, K'WO-TEI, HEI-KA. TEN-SHU-KIYO, テンシュキヤウ, 天主教, n. The roman Catholic religion. KIRISH'TAN, キリシタン, 切支丹, n. Christian.

7) 和辻哲郎『日本古代文化』改稿版、岩波書店、1939年、p.162-163.

8) 『津田左右吉全集』第26巻、岩波書店、1965年、p.244-245。「日記二」明治36年1月28日に採録。

【再版】YASO, ヤソ, 耶蘇, n. Jesus. The Christian missionaries in Japan have almost unanimously agreed, while retaining the Chinese characters, to adhere to the Greek pronunciation of this name, viz. Iesu. *Iesu kiristo*, Jesus Christ. *Iesu wa kiu-sei no shu nari*.

【三版】KIRISUTO, キリスト, 基督, n. (Gr.) Christ: — kyo, Christianity; Iesu-kiristo, Jesus Christ.

ヘボンもブリッジマン＝カルバートソンの中国語訳聖書を参考に、「神」を採用したと思われるが、中国語の「神^{しん}」と日本語の「カミ」が明らかに異なることは十分承知していたはずである。しかし、八百万の神を信じる日本人の神観からは、同義となる言葉などあるはずがなく、布教活動を通して日本人にキリスト教の神観を植え付けることができるの大きな覚悟と確信があったように思う。その覚悟と確信こそが聖書翻訳において、ルビではない漢字とカナの掛け合せ（例えば「栄光^{さかえ}」、「律法^{おきて}」、「祈祷^{いのり}」など）や言葉のこれまでにない組み合わせなどの工夫による、既成語を採りながらも神道、仏教とは異なる明治元訳へと繋がる新しい文体の創出へと向かわせたのだろう。

一方カトリックにおいては、伝統的な「天主」を使い続けていたが、1959年司教会議において、「公教要理」の改訂にともない主な用語の改訂も決定、「天主」は「神」と改めることとなった（他に「玄義」は「信仰の奥義」、「聖寵」は「恩恵」、「悔悛」は「告解」、「品級」は「叙階」など）。

4. 日本人におけるキリスト教神観の受容

このようにして1960年以降は訳語としての「神」が定着し、日本人は多義的な「神」の語を器用に使い分けているかに見える。しかし、訳語の定まりから、キリスト教の「神」は日本人に定着したと言えるのだろうか。日本人のキリスト教神観の受容について考えるとき、遠藤周作『沈黙』の転び司祭フェレイラの次の言葉がよみがえってくる。

聖ザビエル師が教えられたデウスという言葉も日本人達は勝手に大日と呼ぶ信仰に変えていたのだ。... デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作り上げはじめたのだ。... 彼らが信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日まで神の概念を持たなかったし、これからも持てないだろう。

キリスト教精神と日本の精神風土との相克を描いた遠藤周作が辿り着いた神観（「癒しの神」、「母なる神」）については別に譲るとして、このフェレイラの言葉をどう受け止めたら良いのだろうか。確かにキリスト教の土着化が論じられる中で、しばしば「日本においてはキリスト教の来世観や唯一絶対のデウス観念自体がそもそも理解されることはなかった」⁹⁾と言われることもある。はたしてそう簡単に日本人・日本文化を論断できるのだろうか。

武田清子は、キリスト教の土着化を「風土的に順応し、同化するのではなくて、日本人の精神構造の内心部に浸透し... 精神構造を内側から新しくしてゆく価値観、エネルギー、生命力となることを意味している」¹⁰⁾と捉えている。数多くの殉教者を出したキリシタン時代から現在までの長い歴史の中の多くの記録から、われわれは救い（原理）を希求する心と感応する新しい価値観の萌芽を宗教的体験の中

9) 宮崎賢太郎「日本人のキリスト教受容とその理解」『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター、1998年。

10) 武田清子『背教者の系譜－日本人とキリスト教－』岩波書店、1973年、序文ii。

に幾つも見い出すことができる。その一つ一つが日本におけるキリスト教受容のあり様と言えるだろう。その詳細な検証は研究者に譲るとしても、そこには、日本人は「来世志向か現世志向か」、「一神教か多神教か」などの短絡的な見方とは異なる個々の宗教的アイデンティティが見てとれるはずである。ヘボンが持った覚悟と確信とは、翻訳の正確性ではなく自身の宗教的リアリティを通して得たローカル・カルチャーに内在するキリスト教の普遍性そのものではなかったのか。翻訳の変遷は文化変容のプロセスに違いないが、そこに固有の文化におけるメタカルチャー（普遍的要素）の発露の痕跡を見い出すことも可能ではないだろうか。

【参考文献】

- W. E. グリフィス『ヘボン：同時代人の見た』（教文館、1991年）
大島智夫『ヘボン「和英語林集成」の背景』（明治学院大学、1996年）
望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』（新潮社、1987年）
鈴木範久『聖書の日本語』（岩波書店、2006年）
G. シュールハンマー『イエズス会宣教師が見た日本の神々』（青土社、2007年）
戸田義雄編『日本カトリシズムと文学』（大明堂、1982年）
藤田富雄編『講座宗教学』第4巻（東京大学出版会、1977年）
古屋安雄、大木英夫『日本の神学』（ヨルダン社、1989年）

(KURIYAMA, Yoshihisa : 図書館事務課)

「カトリック文庫」の利用について

日頃より、資料をご寄贈くださった方々を始め関係者のみなさまには暖かいご支援ご理解をいただき感謝いたします。カトリック文庫の資料については所蔵目録の刊行を目標に、順次、委員によるオンライン登録を行ってはいますが、なお未整理資料が多く、カトリック文庫資料室としての整備の遅れなどもあり、利用についてはご不便をおかけしています。大変心苦しく申し訳なく思います。このような事情により現在および当面の間は、暫定的な規程により利用していただくこととなっています。

- ★利用対象者：研究目的の明確な方に限ります。身分証明書をご持参の上、来館してください。
- ★利用対象資料：原則としてすべての資料。ただし、資料の状態によって、一部ご利用を制限させていただきます。
- ★利用可能時間：月～土曜日：9:00～17:00
- ★閲覧サービス：資料は、貴重室に収蔵していますので、オンライン目録（Neo CILIUS Knowledge OPAC）で検索し、出納後、指定された場所で閲覧できます。また、未整理資料の一部はカトリック文庫資料室内で閲覧できます。複写および館外貸出は原則としてできません。
- ★図書館 ILL サービス：文献複写、相互貸借は原則として受け付けておりません。

「資料寄贈者等（前号以降から 2008.10 まで）」

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人] 栗村道夫氏

[団体] 幼きイエズス修道会日本管区本部、聖ヨゼフ修道院

≪カトリック関係資料 寄贈のお願い≫

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動を知るために、関係資料の散逸、毀損を防ぎ、かつ広く研究者などへの利用を図ることを目的とし、「カトリック文庫」を 1993 年より設置し、下記の資料を収集しております。

- * 教会刊行物（教会史誌・教会報、その他）
- * 明治、大正、昭和初期のキリスト教関係出版物
（聖書・祈祷書・聖歌集・要理書 およびそれらの解説書、雑誌・新聞・布教資料、その他）
- * 修道会史・教会史 および関係刊行物・資料
- * 日本への布教に関する外国側資料

つきましては皆様方から資料の寄贈を賜りたく、ここにお願い申し上げます。

なお、資料は選書の上、本学図書館の蔵書として所蔵させていただくこととなりますので、ご了承ください。

カトリコス 22 号の訂正

前号の「主要なカトリック逐次刊行物の年表」に誤りがありましたので、ここに訂正させていただきます。

ページ	誤	正
p.2	聖教雑誌（1881.7～？）	聖教雑誌（1881.7～1881.9）
p.4	1941.1 教養と改称	教養（1941.1～1941.12）

なお、表そのものは、掲載されなかった下記タイトルを新たに加えて、Web 版で訂正いたしました。ご了承ください。

URL: <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/katholikos/katho22/katho22.pdf>

【追加タイトル】

『教の園』（三才社，1909.1-1924.12）

『家庭の友』（中央出版社，1949.1-）

『あけぼの』（聖パウロ女子修道会，1956.1-）

『カトリック神学』（中央出版社，1962.8-1971.12）→『カトリック研究』（上智大学神学会，1972.6-）

『社会関係と人間』（社会問題研究所，1963-1987）→『福音と社会』（カトリック社会問題研究所，1987.11-）

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第 23 号 2008. 11. 1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員：岩間潤子、坂倉直美

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/katholikos/katholikos-index.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL: 052-832-3707 FAX: 052-833-6986 担当者：坂倉